

現代ヒンディー語動詞の活用について

坂 田 貞 二

目的 この小論は、現代ヒンディー語の構造をより包括的かつ簡明に記述するための枠組を設定する試みの一環をなすものである。

ここでは、まず、動詞活用 of 構造の概略を明らかにし、ついで、そのなかで人称という要素の果す役割が比較的に限られたものであることを証明したい。

なお、記述の枠組設定のためには、このほかにも多くの問題があり、それらについては順次検討を加えてゆくが、名詞と代名詞の格構造に関する筆者の見解はほぼまとまっているので、近い将来、別の機会に発表したい。

定義 現代ヒンディー語は、歴史的にはデリーとその附近の方言を基礎として発達してきた言語で、今日北インド一帯の共通語として広く使われている。そのデーヴァ・ナーガリ文字で書かれた形は、憲法第三四三条第一項においてインド共和国の公用語と定められている¹⁾。

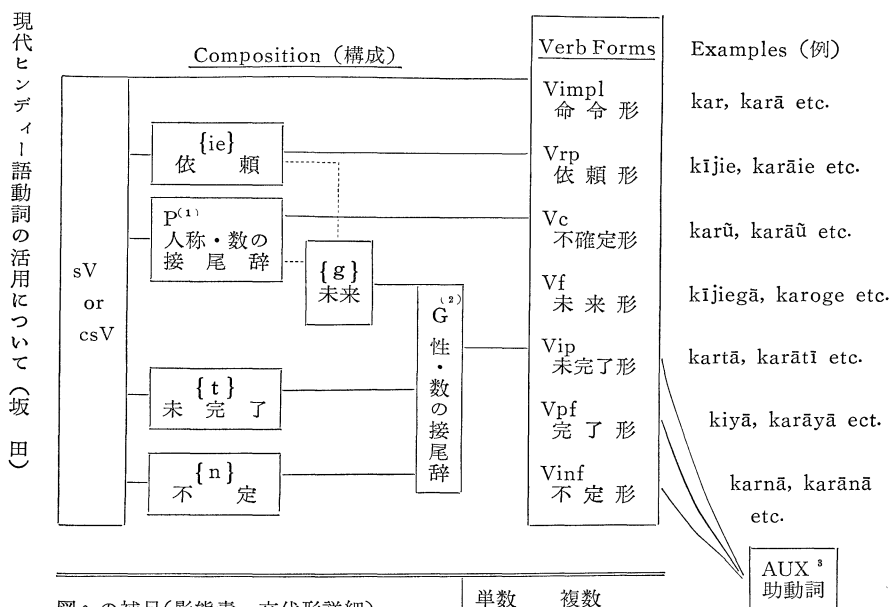
動詞とここでのいうのは、後出の図に組みこまれうるあらゆる

形態素(群)²⁾をさす。これは通常助動詞といわれるものをも包含する。

問題の所在 ここで、動詞活用に関する従来の主要な研究の成果を大まかにたどりながら、その問題点を指摘する。これまでの現代ヒンディー語の文法書、研究書の類は、古典語の言語範ちゆうを(暗黙の)前提としたものと、記述言語学の立場からのもの³⁾とに大別できる。

それらはヒンディー語の動詞活用を規定する要素として、態・法・時制・性・数・人称の六つがあるとして、その各々についての説明・記述はしているが、いずれもがそれらの要素相互の關係についてはほとんど言及していない。しかし六つの要素の機能や分布はけつして一様ではないので、個々についての記述を慢然と並列しただけでは動詞活用の構造は把握できない。たとえば、態・法・時制は、性・数・人称によつて規定されるという關係にあるので、性・数・人称とはレヴェルを異にする。従来の研究の第一の問題は、このように

Chart showing the Structure of Verb Forms (by A. B. Singh)



図への補足(形態素, 交代形詳細)

(2) 性・数の接尾辞 G:

男性
女性

ā
ī

e
ī

(1) 人称・数の接尾辞 P:

一人称
二人称
三人称

(ū)
e
e

ē
(o)
ē

(3) 助動詞 AUX, 現在形: {ho} P:

一人称
二人称
三人称

(hū)
hai
hai

haī
(ho)
haī

本図の作製過程

1. 出所は Amar Bahadur Singh, "Hindi Verbs—An Outline", in *Indian Linguistics*, 26 (1965).
2. 邦語は坂田が書き加えた。
3. 例は元の図の三分の一のみを掲げた。
4. 図への補足および図中の AUX は, Singh 論文本文の記述により坂田がここに付加した。
5. 音素の表記法を印刷のつごうで元の図と変えたところがある。

略 語

sV=Simple Verb Stem, csV=Compound Verb Stem, 但し stem は root or root+causative morpheme(s).

レヴェルの異なる要素を並列的に扱っている点にある。

第二の問題は、現代ヒンディー語の動詞活用において人称の果す役割の位置づけに関するものである。あとで説明するが、人称という要素の関与の範囲はかなり限定されている。しかし、その点について、従来の研究の大多数は特別の言及をしておらず、また少数ながら古くは一八七五年刊のクロッグの文法書、新しくは一九六五年刊のティワリーの形態の研究(書名はともに註(3)に示してある)のようにそのことを明示したものであるが、それらにしても実際に活用形を例示するにあたつて、人称が形態を規定しないばかりも性・数とともに人称の欄を設定して、記述をいたすに複雑にしている。

動詞活用の構造 これらの問題について、これから考察する。

第一の問題、すなわちこれまでの研究においてヒンディー語の動詞活用の記述が、レヴェルの異なる諸要素を並列的にとり扱うという方法でなされてきたことは、Amar Bahadur Singh の “Hindi Verbs—An Outline” という論文によつて一挙に克服された。これは形態素の組み合わせという観点から動詞形を分析し、その構造を明らかにしたものである。同論文からここに引用して示す右の図は、その要約となつており、とくに動詞活用の構造を簡明かつ包括的に説明する点で類例を見ない。

この図は、左端の *SV* または *CSV* に順次□内の形態素を

付加してゆくと右端の動詞形がえられることを示している。

この図を左から右に追つて動詞形の構成される過程をみてゆくと、これがじつはヒンディー語の初歩を学んだ人ならだれもが体験的に知つていることがらを明示したにすぎないことがわかるのであるが、動詞活用の全ぼうを形態素という観点から分析し、これほど構造的にとらえた研究は、ほかに見当たらないのである。⁽³⁾

筆者も、これとは独立に、以前から同様の発想でこの問題についての作業をすすめていたが、Singh の研究に接してその完べきさを知り自分の作業を中止した。それで動詞活用の全ぼうを明らかにするについては全面的に Singh の研究に依拠したわけである。

人称の役割 筆者自身は、それにくらべるとはるかに小さな問題について、一つの解釈を提示するにすぎない。すなわちヒンディー語動詞の活用に関する従来の研究の第二の問題点たる人称という要素について、その果す役割の範囲を明らかにしようとするのである。

前掲の図の補足から明らかなように、人称は動詞の接尾辞および助動詞(AUX)の交代形を、数とともに規定している。その分布は図にみられるように限られた範囲にとどまつており、独立の要素・範ちゆうでありながら一つの形態素相当の比重を占めているにすぎない。

しかもそれらの具体的な形態ないしは交代形は、補足(1)、(3)にあるように人称と数によつて規定されているが、(1)で括つてある形(各々の一人称単数形と二人称複数形)を除外すると、残つた形態は単数か複数かという指標のみによつて規定され、人称は何らの役割も果していない。

このように人称―数で規定される接尾辞や交代形は、ヒンディー語動詞活用において分布が限られており、しかもそれらの形態を規定する要因としては人称はきわめて小さな役割を果すにとどまつている。

したがつて、前掲の *Singh* の図において人称―数に規定されるとされている要素 *p* (=person-number suffix and alternants) を *number* の略語としての *N* によつて代置してもよい、すなわちこれらは人称に関係なく数だけによつて規定されると解釈してもさしつかえないと考える。そのばあい、もちろん、さきほど(1)で括つておいた形(一人称単数形と二人称複数形)が例外となり、その例外を説明するさいに人称という概念が導入されざるをえないのであるから、人称という範ちゆうを無理に除外しなくともよいとも考えられる。

むすび 要するに筆者としては、ヒンディー語動詞の活用において人称―数が形態を規定する範囲が限られていること、およびその限られた場のなかでも人称の果す役割がきわめて小さいものであるから、それを例外規定のなかにくりこ

んでしまい、これまで人称―数の接尾辞(交代形)とされていたものを数の接尾辞(交代形)としてもよいぐらいであること——この二点を指摘して、記述に不必要な概念、範ちゆうをもちこむのを避け、より簡明な記述をしたいと考えるのである。このような作業をヒンディー語の形態全般について行なつてゆけば、その学習が容易となることはもちろん、ヒンディー語の言語構造の全ぼうを明らかにするうえでも意義があり、ひいてはその時間的・空間的・言語的な特性を把握することにも通ずるのではないかと考える。

1 ヒンディー語の歴史、その諸方言との関係については、拙著(田中於菟弥氏と共著)『インドの文学』(世界の文学史9、明治書院、昭和四二年)を参照。

2 この図の出所たる“Hindi Verbs—An Outline”は、筆者の Amar Bahadur Singh は、動詞を「他のいかなる発話にも依拠することなく独立の発話を形成する形態または形態素の連続」と定義してゐる。

3 代表的な例を掲げると——

S. H. Kellog, *A Grammar of the Hindi Language*, 1st ed., London, 1875.

Kamātpīrasād Guru, *Hindi Vyākaran*, 1st ed., Varānasi, 1920.
S. N. Sharma, *Hindi Grammar and Translation*, 3rd ed., Bombay, 1960.

4 Udayanāraṇ Tivārī, “Rūpātīv”, in Dhīrendra Varma (ed.), *Hindi Bhāṣa ka Vikāś*, Varānasi, 1965.

5 代表的な例を掲げると——

Gordon H. Fairbanks and Bal Govind Misra, *Spoken and Written Hindi*, New York, 1966.
構造言語学の立場の註(4)の書、その例外ではなから。